

ペンフレンド(三) 夏休み・入院

中村アキヤ

七月十日、日曜日なのにめぐみは几帳面にも新宿駅に差し入れのケーキを持参して見送りに来た。暑いさなか雑踏の地下道で順番待ちをしていたあきら一行は大喜びだった。

「拝啓、お元気でしょうか？ 先日はわざわざ駅までいらしていただき、その上結構なものを頂戴してどうも有り難うございました。お礼状を皆で書くはずでしたがなにかと取り込みが多く別々に書く事になりました。日曜日の夜の貴重な時間に、それも思いがけない程の差し入れ。なんだかお義理の見送りを強制したみたいになり、今更ながら無理にダンスなんか誘うのではなかったと反省しております。ここまでが公式の文章です。

さて、我々の山行は見送りにいらした誰かさんのご利益で、連日素晴らしい好天に恵まれました。青々とした偃松越しの雲海に浮かぶ白亜の甲斐駒ヶ岳、南アの重鎮であり高山植物の宝庫仙丈岳をなんの苦もなく(といっても僕ではないけどメンバーの中には足に靴ずれ、目に涙という悲しい場面もありましたが)征服することができました。とくに仙丈岳のカーブでは恋の花、黒百合の姿を愛でながら素敵な散策を楽しむことができました。

山頂の雄大な風景に接し、身も心も大自然にとけ込み、しばし没我の境地に浸っているうちに、持参した風邪も山頂の涼風と共にどこかに吹き飛んだようです。

実は、南アからは十七日に無事帰京したのですが、持ち前の放浪癖はこの前途有望な若人(僕のこと)に無為に夏休みを過ごさせることを好まず、再び小生をして上高地に赴かせることになりました。この手紙がお手元に着く頃は、穂高の岩壁に凄い顔をしてかじり付いているかもしれませぬ。

どうも小生は精神分裂症の傾向があるらしく、手紙を書いてもすぐ主題と離れてしましますが、これはお礼の手紙です。とにかく有り難うございました。

前野がいつかサイクリングだか海水浴だか行こうと言っていましたけどどうなりますか 彼は行動に移るのに少々時間がかかるので。でも、一度位はご一緒したいと思います。もう出発する時間になりました。乱筆乱文ゴメン。冷たいものを食べ過ぎて下痢しないように、老婆心で一言。では行って参ります。さよなら。

青木 めぐみ様

あきら拝 七月二十一日」

手紙では、快適な山行のように書いたが、現実とは違っていた。初日の甲斐駒ヶ岳への直登も厳しい思いをしたし、二日目の甲斐駒から千メートル下って北沢峠へ着き、そこから千メートル登る仙丈小屋までの登攀。三日目の北沢峠から伊那谷の高遠方面へは、バスの便がなかったので、油照りの川原を四時間歩くという難行を強いられた。あきらめぐみには見栄をはって道中の辛さについては一言も知らせなかった。

「お帰りなさい！ 南アはとても素敵だったようですね。 景色の素晴らしさもさることながら、様々なご利益をもっているなんて、山って不思議なところですね。皆が山に惹かれるのはそんなご利益を期待している面も多分にあるのでしょうね。新宿駅あたりで山の支度をしている人を見てもう少し体力があったらと（何分にもか弱い女性ですから）口惜しいような羨ましいような気持ちにさせられます。

さて、私達は二十八日から美ヶ原から蓼科高原の方へ参ります。お天気にさえ恵まれたら（その方は充分自信があります）とても景色がいいそうですから、今度はカラー写真を撮ってくるつもりです。ご期待下さい。そのうち拝ませてあげますから。

出発までに少し本を読んでおこうと予定をたてて張り切っていますがともしれば窓の外ばかり眺めていてさっぱり捗りません。去年の今ごろは東京にいなかったんだと思うとあの頃がたまらなく懐かしく思い出されてきます。北海道旅行の時の写真をやっと整理しましたが薄別温泉の写真を眺めながら思わずニヤヤしてしまいました。

きつとお疲れでしょうからくだらないおしゃべりはこの辺でやめておきましょう。ではゆっくりお休みなさい。ごきげんよう。

中山あきら様

めぐみ 七月二十一日」

「拝啓、美ヶ原はいかがでした？景色良し、カメラ良し、そしてお天気は申し分なし、と条件は全て揃っていたのですからさぞ素晴らしいカラー写真ができたことでしょう。期待しています。

僕達の上高地行きはあの憎らしい台風のおかげで穂高の頂上迄あと一時間と云うところでなんとも形容できない程の豪雨に逢い撤退を余儀なくされました。それからの三日三晩は雨の合間にご飯をつくり、食べてはまたテントの中で眠るだけ。夜は夜で風に煽られて倒れたテントを建て直すなど全く情けない有り様で、道路が雨で崩壊する前日に辛うじて上高地から脱出し、帰宅後貴女が美ヶ原に行かれることを知った次第です。

なんとも口惜しいので今度は例の戸山高校の仲間を誘って七月三十一日から八月五日まで白馬岳から鹿島槍を経て針の木岳までの後立山の縦走をやってきました。山小屋の混雑は言語に絶するもので、畳二枚に七人も並べて寝かせられるのです。ちよつと考えて下さい。上を向いて寝ることなど論外、横を向いて寝ていても息をするのが苦しい位でした。帰途松本の浅間温泉に寄り、皆で風呂に入りながら帰ったら海水浴に行こうということになりました。どうせ行くのなら貴女達にも声をかけようと、僕が連絡をとることになりました。卒論やその他のお勉強でお忙しいでしょうが、ぜひどうぞ。具体的なことは貴女達のご都合を聴いてきめるそうです。

それから別の件ですが、十六日に国立競技場でアイーダを上演するそうです。がよろしかったら話しの種に行ってみませんか？

夏休みも半分過ぎ、僕は毎週山に行っている勘定になり、机に向かったのは貴女に手紙を書く時位で、一学期に遊んだ分を夏休みの猛勉強で取り戻すという考えが今更ながら恐ろしくなってきました。貴女はどうぞ最後の夏休みをエンジョイして下さい。

P S ..十日から十二日まで伊豆の戸田海岸に行ってきます。

めぐみ殿

あきら拝 八月十日」

あきららの伊豆行きはアルバイトの延長だった。日本女子大の付属小学校の六年生と四年生そして幼稚園年長組の三人の女の子の家庭教師を押し付けられたが、

この時代に月五千円のバイト代は山やスキーに出ずっぱりのあきららにとっては重要な資金源だった。

三人の小さい娘を持つバイト先のお母さんは、伊豆の別荘を留守にすることに、子ども達とお手伝いさんだけでは留守が不安なので、子どもの宿題が溜まっているからという理由であきららを呼び出したのであった。

「先生、石油って地面から採れるんでしょ？」四年生の次女が質問した。

「私ね、今日海岸で五十センチも砂を堀ったのに石油がでなかったのよ」

こんな生徒を相手に午前中に宿題を済ませると、午後は三人の姉妹を連れての海水浴。

「先生、お母様から膝より深いところへ行ってはいけませんといわれたの」

こう云われて水に浸からずに海岸で暑い日中を過ごすのはまさに苦痛だった。

貸しボートに三人のチビさん達を乗せて沖のブイまで漕ぎだした際、ブイまで泳ぎ着いたが岸まで泳いで帰る自信のないという女性が、疲れ切った顔で「済みませんが、岸まで乗せて下さい」とボートに乗り込んで来た。

その日の夕食の際、六年生の長女が母親にそのことを報告した。

「ボートでブイまで行ったらね、どこかのおねえ様に乗ってきたわ」

「あら、先生お友達がいらしてたのですか？」こう聞かれてあきららは答えに窮した。

溜まっていた絵日記を片付け、工作の大部分を仕上げ、あきららはボーナスを貰って帰京した。翌日、めぐみから又いつもの通りの断りの手紙が届いた。

「涼しい日が続きほっとしていたら、又今日あたりから暑さがぶり返しいやになります。上高地では散々だったらしくていい気味（本心にあらず）。でも道路崩壊の前に脱出できて本当によかったわね。日数からいっても、閉じこめられた人々の中には貴方はいないだろうと思っていました。それでも新聞を見る度にちよつと（ちよつとだけよ！）心配でした。

私どもの美ヶ原行きは台風十三号が来るとか来ないとかに加えて、上高地のほうがだいぶ騒がしかったりしたので、お天気には絶対に自信があったのです

が、親どもの心配も度しがたくとうとう折れて一週間延期してしまいました。

延期した途端台風はそれてしまい、お天気はよくなるし今更ながら我々のお天気には強いことを再認識しました。(延ばしたから晴れたって?)

でもどうやらそれがケチのつき始めて今度はお天気もあまりよくなり、写真機には前の白黒フィルムが入っていて美ヶ原の風景がカラーであまり撮れなくて残念でした。(翌日は、カラーをたくさん撮るつもりでいましたら、お天気が悪かったので)。おまけにその白黒のフィルムを現像してみたらフィルムがちゃんと入っていないくて全然巻き上がっていき、全部失敗。まったく皆様に合わせる顔がありません。

私達も最初美ヶ原の帰りに浅間温泉に出るはずでしたが、蓼科に変えてしまいました。打ち合わせておけば浅間で一緒になれたかも知れませんか。

海水浴のこと、皆に早速相談してみます。今週中にお返事出来ると思いますがそれでよろしいですか。貴方の犬かきを是非拝見したいものです。

十六日のアイダ、私も行きたいのですが丁度その日、日豪対抗の水上競技に行く事になっていますのでどうぞあしからず。貴方という人はどうして人の都合の悪い時にばかり誘ってくださるの?フラレタなんて云ってむくれないで下さいね。(水泳を見に行くのは前から決まっていたのでちよつと変えられませんので)

どうぞ残された夏休みを有効にお使いください。ごきげんよう。

あきら様

めぐみ

八月十二日

「暑いとはいえ、陽射しに秋が感じられる今日この頃です。残り少ないお休みを指折り数えてプランの建て直しに大童というところです。今年の夏は虫の声が一汐身にしみませ。

さて、海水浴のことですが、皆に連絡しましたら、仰木さん、西田さんはここ五、六年、水に入った事がないし、泳げないから遠慮すること、久慈さんは行ってもいいけれど皆が行かないのでは…。ということでした。折角お誘い下さり、犬かき迄練習なさったのにこちらが気乗り薄で本当に申し訳なく思っております。でも一度皆が会う機会は持ちたいですね。何かいいお考えはなくて?

二十日は例の教職実習の続きで中学生のお伴をして奥多摩へ参ります。子供

達との付き合いもなかなか骨が折れます。残り少ない夏休みを少しはお勉強もなさって楽しくお過ごし下さいませ。とり急ぎお知らせまで　かしこ

あきら様

めぐみ

八月十六日

九月から新学期が始まり、すぐに期末試験が待っている。夏休みの間青春を謳歌した二人もしばらくの間は真面目な学生に戻る。

めぐみは教職実習のレポートをまとめ、あきらは大学に戻り七月にやり残した化学実験を深夜まで続けることになった。

この頃から化学科の掲示板に企業からの求人広告が出るようになった。今年の四年生は二十八名だったが、半分以上は大学院進学希望者で、企業への就職志望者は十人ほどであった。初任給の一番高い会社は、東レ（初任給一万八千円）で、東亜燃料、新興の石油化学会社、大手の製鉄会社がそれに続いた。

有機化学専攻のあきらと物理化学専攻の赤川は一年上の矢澤先輩に東大病院の食堂で最高級の昼飯をご馳走になった。それだけの理由で矢澤の在籍している財閥系の石油化学会社の面接を受けることになり、その結果即日採用が内定した。ただ青田狩り禁止のルール違反になるので、来年の二月に会社から正式の通知があるまで待つようにとのことだった。就職があまりにも呆気なく決まったので、あきらには両親には報告したがめぐみには一言もしゃべらなかつた。

あきらにとっては、卒業に必要な単位をしっかりと確保する事と、あと半年の学生生活をフルにエンジョイすることが当面の目標であった。

珍しくめぐみから電話があつて「チョット会いたい」とのこと。あきは喜んで新宿駅で会ったが、めぐみから津田塾大音楽部の合唱祭の切符を手渡されただけで、お茶も飲まずに別れてしまった。この時期はお互いに忙しいのである。押し付けられたキップは全部捌けず一枚だけ送り返すことになった。

「拝啓、秋もだいぶ深まり朝晩は相当冷気が身に沁み、秋刀魚も脂が乗ってきました。相変わらずお元気に食欲の秋を謳歌なさっていることと存じます。

当方も期末試験で、連日瞼を腫らして登校し、試験問題に悪戦苦闘して新たな

ショックを受けて帰宅という、悪夢のような一週間に身も心も消耗しつくして、目下静養中というところです。

そんな訳で、一ヶ月も前に無理に押しつけられた？合唱祭の切符は今日やつと例の仲間に発送したのですが、我々のチケットの収容能力は最大五枚なのにどうしたことか六枚も載いてしまい、八方手を尽くして心当たりを誘い歩いたのですが、僕の誘い方が下手だったのかおたくの合唱祭に魅力が乏しいのか（勿論前者であると私は信じていますが）尻込みする者ばかりで、結局、今更ご迷惑だとは思いますが、売り込み上手の貴女にお返しするのが最上と考え同封する次第です。

なお、売れた切符の代金はいつお渡しすればよいのでしょうか？代金があつまるのはどうせ合唱祭当日ですがどうでしょうか？とりあえずご相談まで。ではしつかり練習して下さい。

めぐみ様

あきら拝

十月二十一日

PS この手紙が着く頃は小生八ヶ岳にいる筈です。期末試験が終わっても一日も休みがないので大好きな授業をエスケープまでして、山に行くのが辛くてしかたがありません。せんだってのN響は試験の最中だったので妹の幸子に日比谷行って貰いました。妹は貴女らしい人を見かけたそうです。美人だっつ誉めていましたよ」

「八ヶ岳はいかがでした？ 雨に降られたのではなくて？どうも雨男は貴方らしいですね、これからは気を付けなくちゃ。ずぶ濡れの強行軍とか晴れ間をみて急いでご飯づくりなどという悲しい光景がなかったことを祈っております。

黒川さんも二、三日前にやはり八ツに行つて来ましたがお天気に恵まれとても素晴らしかったとのことでした。今度N響で会ったら威張られますよ。貴方にとっては試験や勉強は山行の口実になっているようでどうも気になります。

山行は結構ですけど遭難だけはなさらないようにね。

さて、切符の件いろいろ有り難うございました。お陰様で何とか全部さげけそうです。勿論代金のほうはいつでもよろしゅうございます。本当は差し上げたいのですが皆さんが恐縮なさるでしょうから。（でしよう？）

合唱祭までにあと一週間、このところ練習と卒論とのかけもちで忙しい日々を送っております。その間に結構映画などに行っているのですからこれはどういふことなのかと我ながら不思議になります。

まあ、山から帰って来て落ち着いたら大好きなお勉強の方も少しは熱をお入れになることですね、なんて又憎まれ口になってしまいましたがお怒りにならずに、貴方の勉強好きはよく存じていますから。とにかく山でも勉強でもいいですからお元気にお過ごし下さい。

誰かさんとは違って審美眼？をお持ちの妹さんによろしく。ごきげんよう。

PS 小金井も市に昇格しました。これからは北多摩郡ではありませんからどうぞよろしく。

めぐみ 十月二十六日

十一月の下旬、風は冷たく乾燥した晴天が続いた。銀杏の落葉がキャンパス内の道路を明るく染めていた。あきらは大学の実験室を抜け出して大学院生のチームと野球の試合をしていた。守備はあまり上手くはなかったが打順は二番で出塁率はよかった。駆け足も遅く運動神経はあまり発達しているとはいえないかったが、器用にバットの芯にボールを当てるコツを知っていて、頭脳はともかく運動は白痴に近い東大生の中では惨めな思いをしたことがなかった。

バッターボックスに入り素振りをした時にあきらは右わき腹が引き釣るような感じがした。その時は凡打でおわったが守備につくと今度はお腹の中心部が急に痛くなってきた。チェンジになっても守備位置のまましゃがみ込んでいるあきらをチームメイトがすぐ前の東大病院にかつき込んだ。耳たぶから採血した若い医者が、白血球が多いから盲腸炎だという。

「おい中山君、君は運がいいぞ。今日は清水先生が執刀して下さるそうだよ。

盲腸は薬で散らせば一時は治まるけどまた何時痛くなるか分からないぜ。君は山登りをするかい。それなら今切つといた方がいいよ」

その若い医者は今をときめく清水外科の大本尊である清水教授の執刀する腕前を見学する機会をねらっていたに違いない。しきりにあきらを説得した。あきらはそのころには痛みが遠のいて、直ぐに野球に戻りたい位であったが若い先生の熱意に押されて、「じゃあ、お願いします」と云ってしまった。

あきらはそのまま入院し即手術ということになり、手術室に入る前に家の母親に電話を入れた。

「急患？誰が急患なの？えつ、あきら、貴方が急患なの？病院には何を持って行けばいいの？」

慌てた母がタクシーで飛んで来たときには手術は終了していた。なんでも清水教授のご都合で予定より早くオペを開始したのだそうだ。その夜、麻酔が切れはじめてからの痛みは耐え難く、手術前よりは術後の方がずっと痛かった。

翌日の昼過ぎ、病院内に軍隊の行進のような靴音が聞こえ、それはあきらの病室の前で止まった。なんとクラスメートがほぼ全員で見舞いに来たのだった。あきらの元気そうな顔を見ると彼らは安心してあきらに背をむけてベットの縁にコの字型に腰掛けた。座れない者は壁に寄り掛かった。

彼らのお目当てはお見舞いの食べ物である。ジュースをはじめ果物、カステラそれにあきらの食べ残した病院食まで綺麗に消化してしまった。食べ終わると殆どの者が潮の引くように帰って行った。数人の仲良しだけが残り手術の様子などを細かく聞くのであった。

「手術の前にあその毛を剃るっていうのは本当かよ？」

わが野球チームのピッチャーで四番の赤川が早速質問した。あきらを負ぶって病院につれてきたのは彼である。

衣類を全部脱いで手術台に横になったあきらに優しくタオルを掛けてくれた看護婦がいた。マスクをしているので顔の輪郭は分からないが大きな黒い瞳がとても印象的だった。

「タオル張りの手術室に二人だけなんだよ。高橋さんという看護婦はニコリともしなかったがとてもいい女だったぜ。彼女が近づいて来て、小さな声で何か云うんだよ。よくわからなかったのて一、三回聞き直したら段々赤い顔になってテ一モーしますって云うんだ。剃毛だよ。それで…」

「やられたか？」

「二人だけでやられるっていうのは変なモノだぜ。剃るほうも剃られるほうも黙っているしさ。ゾリゾリと音だけ聞こえるのさ。その中に盛り上がってきちやうしさ」

「なんだ、お前本当に病気だったのかよ？」

「実際はもっとひどいんだよ。剃毛も無事終わってオペのスタッフが集まってきたんだ。そしたら先輩の看護婦長がタオルの裾をちよつとまくって、『あら高橋さん遠慮したのね』って云いながらまた、毛を剃るんだよ。今度は石鹸なしだぜ、その時はもう盛り上がらなかったよ」 笑うと傷口が痛むので彼らと話すのは苦痛だった。

若さのせいかわり振りは顕著で、あきららは看護婦の隙をみて歩いて十分程の化学科の教室に顔を出しにいった。さすがに無理だったとみえ貧血を起こし、また赤川に負ぶさって帰院する羽目になった。担当の看護婦は事実を知って仰天したが自分の責任になるからと医者には黙って居てくれた。看護記録には一時血圧低下すぐに回復、とでも書いたのであろう。

翌日回診の医者にあきらは一週間後にあるダンスパーティーに行っていていいかときいた。医者はニヤリと笑い、

「ダンスパーティー？ ああ、行って見ているだけならいいよ」といってそばの看護婦に、「中山君がダンスに行くときは君がちゃんと付き添いをしろよ」と冗談をいった。

あきららは母親の来院時にめぐみの家の電話番号を告げ、こんな状態なので約束のダンスには行けない旨連絡するように頼んだ。思わぬ人から思わぬ内容の電話を受け取ったためぐみは仰天した。

「その後経過はいかがですか。冬休みを控えて手術とは…。お察しいたします。

この冬はスキーなんかしてはいけません。さぞかしお床の中で嘆いていることでしょうね。

学校でお腹が痛くなったとのこと、いかにも貴方らしくて思わずニヤニヤしてしまいました。(ごめんなさい)でも、山などでなくてまだしもですね。まあ、たまには寝ながら精神修養もいいでしょう。東大のキャンパスもここ当分はさぞ静かな事でしょうね。何だか少しもお見舞い状らしからぬ手紙になってしまいました。これがこれほつきとしたお見舞い状ですから念の為。

お母様からお電話を戴きびっくりしてしまいました。そんなに心配なさらくてもよかったのに。こちらは未だに卒論は山のものとも海のものとも、といっ

た次第ですから、七日のダンスにはとても一緒にできなかったでしょうからどうぞご安心ください。ダンスもここ当分はおあずけでしょうね。

山できたえた身体だから盲腸位は何でもないと思いますが、甘く見てあまり無茶をなさらないようにね。今度のN響定期ではお目にかかれないうえに、早く良くなられることを祈りつつ。お母様にもよろしくお伝え下さい。ごきげんよう。

中山 あきら様

めぐみ

十二月十日

十二月のダンスパーティーは諦めたあきらだったが、なんと正月休みには湯沢のスキー場で滑っていた。抜糸したとはいえ傷口はまだピンク色で周囲の皮膚とは明かに異なる色調だったし、縫ったあとは黒くかさぶたができていた。その上に大きめの絆創膏を張り運動選手の使うサポーターで下腹部をカバーした。始めのうちこそこわごとと緩斜面を選んで滑っていたが、一度転び二度転びしている中に傷のことなど完全に忘れてしまい、気が付くと普段と変わらないペースで果敢に滑り、雪煙をあげて転倒する自分を「我ながらよくやるわい」と誉めてやりたかった。それでも夕食前に温泉に入る時には、傷口からお湯が浸みこまないかちよつと心配するのだった。

その頃の湯沢は鄙びた湯治客むけの温泉で、駅から古い木造の宿屋に辿り着くにはリュックとスキーを担いで、凍った雪道をよろけながら歩かなければならなかった。連日の豪雪から建物を保護するために屋根の雪を降ろすので、路面は宿屋の玄関口からは一メートル程高くなり、道幅も二人が並んであるくには狭すぎるのだった。

この辺りにはまだ混浴の習慣が残っていた。あきらが寝る前にと、湯船に首まで浸かり温まっていると、仕事を終えた女中達が湯殿に入ってきた。雪焼けした顔からは想像できないくらい湯気の中の彼女らの身体は若やいで見え、白くそして豊満であった。思わぬ光景にドキドキしたあきらが急いで部屋に戻り仲間に報告した。それを聞いて、いったん風呂から上がった中田が濡れたタオルを驚掴みにして風呂場に急いだ。慌てて狭い階段を踏み外したのか、ドドーンという大きな音が部屋まで聞こえた。

宿の正月料理は雑煮で、味付けは鶏の出汁の効いた味噌汁であった。大きな

どんぶりに里芋、人参、ごぼうのぶつ切り、太い大根の輪切りを山盛りにし、そのてっぺんに東京で食べる餅の二倍はある、わらじのような大きな餅が乗っている。これに大根のなます、ぜんまいの佃煮それに野沢菜の漬物が加わる。新潟県湯沢町のオセチ料理だ。食べて滑ってそして寝る、これがあきら達の最高の正月になった。

(続く) 9496語